

オランダ東インド会社とバタヴィア (1619-1799年)

——町の崩壊の原因について——

レオナルド・ブリュッセイ*

The Dutch East India Company and Batavia (1619-1799)

J. Leonard BLUSSÉ*

Until now it has only been partly explained what the causes and origins were of the insalubrious conditions at Batavia that forced the Dutch to move their headquarters from the coast a few miles inland by the end of the 18th century.

Bad climate, a town lay-out unsuited to the Tropics and natural disasters are the current arguments. In this article it is suggested that the port city's downfall was rather the result of a combination of bad management—during the

VOC period Batavia always remained a tool of the Company—and the rash and thoughtless development of the Batavian hinterland, the *Ommelanden*. A set of demographic charts published here for the first time clearly reflects the downward trend starting from the 1730s. Institutional and ecological factors were the main reasons for the city's demise only a few years after the Company itself had collapsed.

都市と王冠と権力は時間の流れの中で、日々死滅する花のごとく短命である。されど、新しい芽が人々を楽しませるごとく、空虚にして顧みらるることのない土地から再び都市が興る。

(ルドヤード・キプリング)

している [Couperus 44, A. R. A.; Weitzel 1860: 8-10]。

バタヴィアの町はもはや昔日の名高い大都市ではない。倉庫以外の重要な建物や家屋のほとんどは倒壊している。城塞は石屑の堆積に変わり果て、町を囲む城壁の半分以上と、その門は取り壊されてしまった。町は幅の広い運河に囲まれる村にすぎない。……現在のプリンセン通りは、市の中心部寄りにわずかに家屋を残すばかりの、陰鬱な道である。

このプリンセン通りの左手に運河が認められる。

これがかつての美しいテイヘル運河だが、この運河とプリンセン通りの間のさまざまな高い建物は、いまや影さえ留めていない。いったい誰がこれを、フェレンティン (F. Valentijn) が賛辞を呈したあのテ

I 序

(1) はじめに

19世紀初頭、沖合の泊地からボートに乗り替え、浅瀬を越えてバタヴィア市に上陸した人々を待ち受けていたのは、決して愉快ななごめではなかった。まるでゴーストタウンであった。当時のある旅行記は次のように記

* Center for the History of European Expansion, Leiden University, Middelstegracht 4, 2312 TW Leiden, The Netherlands

イヘル運河だと認めるだろうか？ファレンティンはわずか80年前に以下のように書いている。テイヘル運河には調和のとれた美しい建物の列があり、町の最も素晴らしい部分である。この優雅な並木のある、まっすぐな運河の美しさは、私がオランダでみた何よりも優っている。なるほど、アムステルダムへのヘレン運河等々に、もっと美しい景色やもっと広い運河を認めうるかもしれないが、それはこのテイヘル運河を初めとするバタヴィアの運河が人々の眼に訴えるほどの喜び、満足、歓喜を与えるものではない。

この旅行記の筆者クペルス（A. Couperus）は、市内をさらに観察したのち、この一文を次のように結んでいる。

ヨーロッパ人の移住が別の場所、すなわち少しだけ高いところにあるレイスウェイク、ノールドウェイク、ウェルトフレーデン（Rijswijk, Noordwijk, Weltevreden）に新しい居住地をつくったのは当然というべきであろう。

クペルスのこの印象派風のスケッチは、18世紀から19世紀への変わり目のころ、バタヴィア市の様相に根本的な変化のあったことをよく示している。町の人々は、あたかも蛇が脱皮するかのごとく、2世紀近くを過ごしてきた威厳に充ちた建物と城壁から脱出して、10キロメートルほど内陸の、様相の全く異なる田園都市において新しい生活を始めたのであった。

本稿は、19世紀初めダーンデルス（H. W. Daendels）将軍の統治の時期に、オランダ人が生き残るために少し高いところにあるウェルトフレーデンへと飛び出さざるをえなかった原因、とりわけバタヴィア市の非衛生的な諸条件の由来を詳しく検討するものである。

(2) バタヴィア市衰退の原因に関する通説

「東洋の女王」といわれたバタヴィアが「東洋の墓場」に変わってしまった原因について、従来の回答は一面的かつ不十分である。19世紀の医学専門家たちの分析が強調するのは、気候の悪さ、低く垂れ籠める有毒な湿気、汚れきった運河などであり、そして当然ながら彼らの主要関心事つまり「ネズミ熱（remitterende rotkoortsen）」とか「赤い樽（roode loop）」といった怪しげな名前の奇病であった。

オランダ東インド会社の職員も、自然条件に主な原因を求めていた。すなわち、熱帯の低湿地という不健康な気候、真水の欠如、そして1699年のサラク（Salak）火山の大噴火によって砂洲が町の前にできたことである。会社職員が会社の政策をあからさまに批判することはほとんどないが、先輩たちの町のつくり方はしばしば批判している。この町のつくり方とは、家々を隙間なく連続させ、多数の運河を掘り、その脇には立派な並木を植える、というオランダ風のつくり方のことである。すなわち、狭い場所に人口が集中しているため居住条件が健康によくはない上に、運河がこれをさらに悪くする。運河の汚れた水の悪臭は、風が家並みと並木に遮られるために、拡散しないというわけである。

ラッフルス（T. S. Raffles）が1811年バタヴィアに来た時、事態はすでに火急の問題でなく、彼はその分析にあまり大きな関心を示していない。オランダ人のバタヴィア脱出は彼の前のダーンデルス総督の時に起こっていたのである。ラッフルスは『ジャワ史』の中で上記の議論を並べ、オランダ人を嘲笑するためだけの悪意のあるコメントをつけている。彼はまた、信頼性に欠ける統計でもって補足説明を行なっているが、これには彼自身ばかばかしく思ったであろう。なぜならば、彼が提供するデータによれば、バタヴィアは1730年から1752年の間に、1,119,375人の人

口を失っており、これは、この23年間バタヴィアの人口が5カ月ごとに絶滅を繰り返したことを意味する [Raffles 1817: viii]。

1830年代のファン・ホーヘンドルプ (C. S. W. van Hogendorp) やカウヘニウス (W. M. Keuchenius) の報告は、ラッフルスよりも問題の本質に迫っている。すなわち、これらはオンメランデン (Ommelanden)、つまりバタヴィアの後背地の灌漑システムの機能低下、およびそれに加えられたと思われる破壊を指摘している [Hogendorp 1833; Keuchenius 1875]。しかしながら、これらも先の諸説と同様、バタヴィアの衰退という現象を記してはいても、その本当の原因は記していないというべきである。

かくして今日なお通用している19世紀以来の説に従うならば、町を囲む城壁、運河、隙間なく並ぶ家並み、というオランダの都市と同じつくりの町を熱帯に建設した時に、オランダ人は自らに死刑判決を下したことになる。

しかし、この説は歴史的事実による検証に耐えない。バタヴィアは実際には最初の100年間は完全に健康的な町であった。いく人かの歴史家がこの事実を認めている。しかし、この歴史家たちもまた、1699年のサラクの噴火によってバタヴィアに入るチリウン (Tjiliwong) 川の一部が封鎖され、汚濁してしまったために、町の衛生条件が完全にバランスを失ってしまったと結論を急いでいる。ところが、東インド会社時代の文書を詳細に調べると、バタヴィアの死亡率が急上昇するのはサラク噴火の34年後の1733年であることが明らかになる (後述) ので、この説もまた事態の本質をついたものとはいえない。

(3) 問題の本質

健康的な町が墓場になってしまったこと、つまりバタヴィアの死滅の根本に横たわる第

一の要因は、オランダ風の町のつくりや自然災害に求めるべきではなく、バタヴィアの後背地オンメランデンに求めるべきである。オンメランデンの砂糖栽培のための性急な乱開発と、その後の砂糖輸出の激減が、この平野の自然灌漑システムに重大な変化をもたらした、生態系のバランスに影響を与えたことを重視すべきである。

一般的に言って、港湾都市は、都市＝後背地関係の側面において、周辺部の政治的平定と近代的な生産様式による開発があって初めて、持続的成長を達成しうるものである [Telkamp 1978: 41]。この点でバタヴィアの悲劇は、オンメランデンの利用が主としてオランダ東インド会社の貿易のためであって、バタヴィア自体のためではなかったことに由来する。オンメランデンの開発が急速かつ無秩序であったこと、およびバタヴィア市が自らの直面する諸問題に対応する力を持たなかったことは、いずれも東インド会社の制度がもたらしたものであった。より正確にいうなら、バタヴィア市に自らのための独立した制度的枠組が欠如していたことがもたらしたものであった。

単一の因果関係のみの分析は、バランスのとれていたシステムの崩壊を説明するのに不十分である。同時に作用したさまざまなプロセスの研究によってこそ、よりよい理解に至りうる。本稿は生態系的要因と制度的要因の相互作用として事態を捉えようとするものである。

II バタヴィアの統治組織、人種的配置、機能と有力集団

(1) 統治組織

17世紀末期にバタヴィアを訪れた旅行者の熱意あふれる説明を読むと、この都市は都市計画の父アリストテレスが理想的な都市に必

要とみなした四つの要件——健康，防衛，政治活動に適すること，美しさ——[Aristotle 1330a: 34ff]¹⁾への配慮を備えていたように思われる。

しかしながら，バタヴィア市はあらゆる政治的権利を欠いていた。バタヴィア市には，名目的にはともかく，実際には，オランダの場合に都市に内在的な力を与えている政治的制度が欠如していた。東インド会社の重役会であるアムステルダムにある17人会は，真の都市になるために必要な権利を，バタヴィアとその住民に与えるのを拒否した。17人会にとってバタヴィアは，アジアにおける中心的拠点，貿易基地以上のものではなかった。17人会の代理人である政庁が，いかなる場合にも権力を握っていた。城壁都市バタヴィアは東インド会社崩壊後わずか10年で崩壊したが，このようにバタヴィアの運命が自らを生き出した貿易体制の運命と深く結ばれていた原因は，バタヴィアを一種の巨大な商館として扱うという17人会の堅固な方針にあった。

以下で町の人種の配置，機能，有力集団に触れ，そのあとで統治組織，機能，有力集団の三つの概念を利用しつつ町の歴史を編年史風に扱い，またこの三つの概念の間の相互作用に立ち入ることにしたい。

(2) 人種的配置

バタヴィアの人種的配置と密接に関連する人口統計には，不明な点が多い。バリ人，マルダイケル (Mardijkers, 解放奴隷)，中国人といった重要な住民グループを扱う研究はいくつかあるが，これら住民グループの量的側面はなお不明である [Blussé 1981; Haan 1917; Lekkerkerker 1918: 409-431]。また，ジャカルタの人種の側面に関する興味深い論文もあるが，東インド会社時代はごく簡

単に扱っているだけである [Castles 1967: 153-204]。

都市の生涯の叙述には当然編年史的な扱いが要求される。次に掲げる6枚のグラフ²⁾は，バタヴィアとオンメランデンの人口の推移を示すもので，入院患者の検温表のように，事態の診断に役に立つ。グラフは1730年代に始まるバタヴィアの衰弱をはっきりと示している。残念ながら，筆者はいまだ，各住民グループが町のどの部分に住み，どんな役割を担っていたのかを調べる余裕がない。これは今後の課題としておきたい。しかしいずれにせよ，1740年まで市内の各所に住んでいた中国人を別にして，原住民は，他の多くの植民地都市と同様，主として，都市計画の範囲外である都市のまわりに住んでいた。

このグラフは数的に重要な住民グループのみを示している。その他の住民グループについては，本稿では序文で引用した元マラッカ知事クペルスの毒舌を紹介すれば十分であろう [Couperus 44, A. R. A.]。

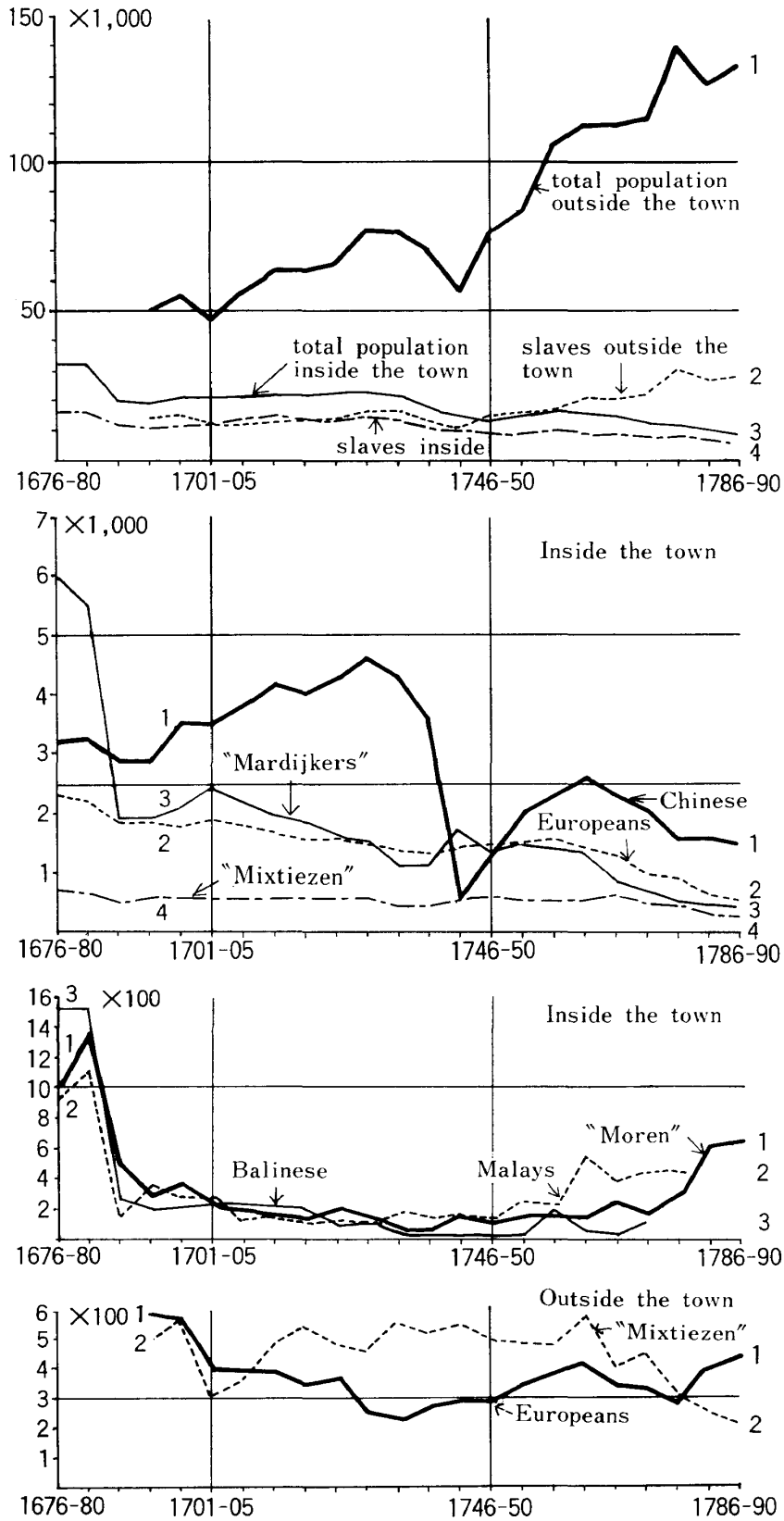
バタヴィアにいるその他の原住民はマレー人，ブギス人，マカッサル人，アンボン人，ティモール人，ベンガル人，セイロン人，その他である。これらを一つずつ詳しく扱う必要はないだろう。率直に言って，セイロン人は欺瞞的である。ジャワ人は怠惰で愚鈍である。ブギス人は陰険で残虐である。ティモール人は迷信深い。アンボン人は傲慢で虚栄心が強い。マカッサル人は残虐である。マレー人は魯鈍である。ベンガル人は手癖が悪い。そして，どれもこれも好色である。

なお，奴隷が半数近くを占めているが，そ

2) このグラフの作成に際して，筆者がオランダ国立文書館 (Algemeen Rijksarchief, A. R. A.) で収集した資料の処理については Jaap Valkenburg の，グラフを描くについては Rob Kloosterman の援助を受けた。記して感謝の意としたい。

1) また次を参照。M. I. Finley [1977: 305-327].

図1 バタヴィアの人口 (1676/80-1786/90)



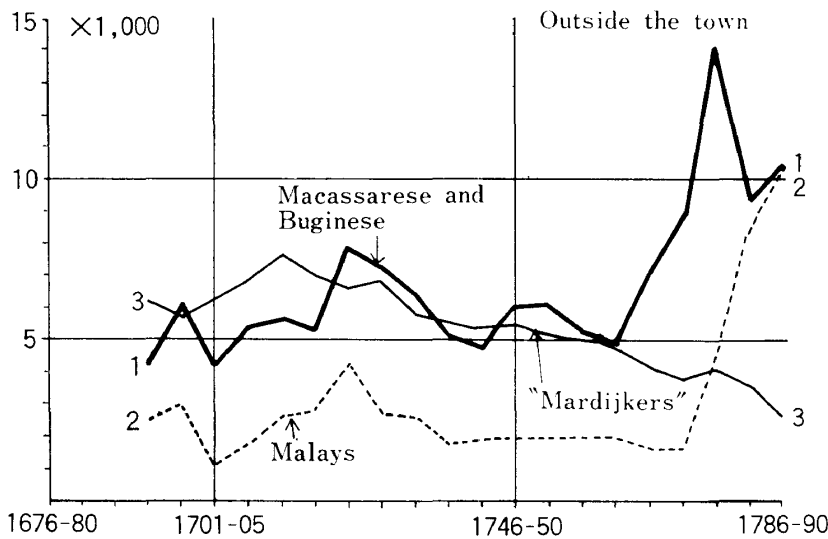
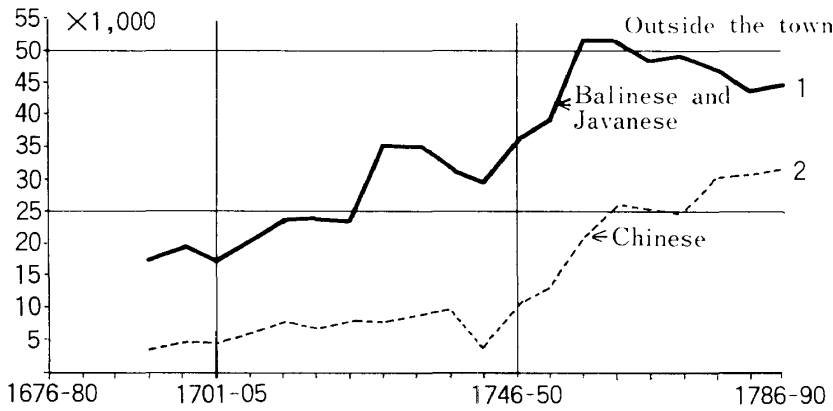
のほとんどはスラウェシの出身である。そのほか、インドのマラバルやベンガル、またスマトラやバリから連れてこられた者もある。1年平均3,000人の奴隷がバタヴィアに輸入されている。

(3) 機能と有力集団

バタヴィアはそもそも東インド会社の貿易活動の進展の中で建設され、会社の根拠地として、会社の商品の倉庫として機能するよう考えられていた。しかし、商取引の進展によってバタヴィアは、農村部および群島内の原住民の交易網の諸港との結びつきを持つようになる。すなわち、自由市場を備えるバタヴィアは直ちに群島内の貿易の中心地に成長し、また、やがて後背地にとっての中心地にもなった。オンメランデンは当初は緩やかに少しずつ開かれたが、1680年以後は西洋人と中国人の開拓者によって席捲される。

城壁内のバタヴィアの編年史に入る前に、この町の3種類の機能に結合していた有力集団に触れておかねばならない。これによって、東インド会社以外には私企業の余地

ブリュッセイ：オランダ東インド会社とバタヴィア（1619-1799年）



の全くなかったことも明らかになるであろう。この状況はド・ハーン (F. de Haan) がみごとに描いている [Haan 1922: 1]。

東インド会社時代、その職員が権力と利益の掌握者であり、資本と大土地の所有者であった。これに反して、自由市民階級は数が少なく、明瞭な方向性を持たず、当局が定める枠内におとなしく留まらねばならず、政庁が時たま定める禁令を笑って受け容れねばならなかった。

貿易根拠地は維持費用を自弁すべしとされていた。これはもちろん17人会の利益のためである。しかし、貿易基地の維持には大きな費用がかかり、ほとんど毎年赤字であって、会社自体にとっても費用のかかるものであることが直ちに明らかになった。会社の拠点に

勤務する給料の甚だ低い職員にとって、バタヴィアは富の源泉になった。彼らは雇主の犠牲の上に自らを養い、そして、私貿易、密貿易、また着服した資本の現地での投下によって会社の財産を略奪した。

会社の拠点としてのバタヴィアの維持のために、またバタヴィアへの物資供給のために必要な自由市民の収入源は、交易根拠地としてのバタヴィアが提供すると考えられていた。この自由市民の主な収入源はサービス部門、醸造、飲屋など、そして私貿易であった。しかし、自由市民が会社の貿易事業を阻害する傾向が現われると、17人会

はあらゆる権力を行使して彼らの活動を妨害ないし制限した。17人会は自由市民の生計の基礎たるべきものを破壊したのである。

バタヴィアの中国人はというと、彼らは手工業職人、漁師、農業者としての技術を備えており、また少ない費用で貿易活動ができる上、もともとほとんどが会社の貿易ネットワークの外で貿易を行なっているので、会社によって貿易を統制されることがなかった。この住民グループがバタヴィアの真の市民の役割を実際に埋めることになるが、彼らは政治的権力を欠いていた。また中国人は1740年の大虐殺によって絶滅する。本稿ではこの大虐殺には立ち入らないことにしたい。³⁾

3) この事件については J. Th. Vermeulen [1938] および L. Blussé [1981] を参照。

次に、オンメランデンとの関係におけるバタヴィアの役割についてみておきたい。オンメランデンは、バタヴィアにいる会社のエリートにとってよい投資目標、収入源になった。富裕な会社職員は土地を所有するようになり、奴隷または中国人小作人を使ってそれを開発した。これによってバタヴィアはゾムバルト (W. Sombart) のいう「消費都市」[Sombart 1916: 142-143]⁴⁾ に近いものになった。すなわちバタヴィアの収入は、都市が生産したものを農村に売ることよりも、反対給付の必要のない税金や地代といった、法律に定められた権利に多くを依存するようになったのである。この種の都市=後背地関係が樹立される過程はあとに述べるが、そこではオランダ人自由市民の役割は小さく、中国人が大きな比重を占めていた。そして、オンメランデンのバランスのとれた開拓の可能性は、17人会が砂糖やコーヒーなどの輸出産物を大量に要求したことによって、閉じられたのであった。

バタヴィアの三つの機能は相互に関連していたが、不幸なことに、17人会が、バタヴィアの自由経済の中心地としての真の発達を、自らに対する脅威とみなしていた。このことは次章で述べる、自由市民に政治的権利(というより政治的特権)を与えない市政のあり方から明らかである。かくしてコミュニティとしての町を創造する可能性も閉じられていたのである。

ここで、次のように結論することができる。オランダ人自由市民と中国人とが、数的に多いというよりむしろ影響力が大きすぎるために排除されたのち、二つの有力集団が残った。すなわち17人会と会社職員である。17人会は植民地から搾り取り、会社の勘定を黒字にするために、できる限りのことを行い、

4) この分析は明らかに一層の精密化が必要である。M. I. Finley [1977] を参照。

他方、現地の会社職員も自分の懐を肥やすために同じことを行なった。この作用が両者相俟ってオンメランデンの生態系を完全に變化せしめ、この變化が町の衛生条件を決定的に悪化させるのである。彼らがこの自己の行為をどれほど理解していたかは興味深い問題であるが、本稿では立ち入らないことにする。

III 最初の60年——孤立の時代

(1) 町の誕生

東インド会社は1610年ジャカルタ領主から商館を建てる許可を得た。ヤン・ピーテルスゾーン・クーン (Jan Pietersz. Coen) は、バンテン市場独占の試みが失敗に終わったのちの1618年の夏、会社の所有物のほとんどをバンテンからジャカルタの商館に移した。会社がこの商館の要塞化に努めていたその年の末に、イギリスとジャカルタ領主の連合軍の攻撃を受けたが、翌1619年の春、会社はジャカルタ領主の軍隊に大損害を与えた。この時イギリス軍はすでに撤退していた。ジャカルタ領主の宮廷は灰燼に帰し、その廢虚にバタヴィア市が建設された。この城壁都市は1660年までには最終的形態を整えることになる。

ここで、バタヴィア市のプランに触れておきたい。北は船の仮停泊所に面しており、この泊地は湾内の多数の小島によって荒波から守られている。町の南は、あるかなきかの傾斜で、かなたの山裾まで続く平野が展望できる。これは湿地が多いが肥沃な平野で、森林に覆われており、この森林を区切るように流れの速い川が走っている。

城塞はチリウン川の河口に位置し、四つの突出部のある正方形を形づくっている。城塞内には倉庫、事務所、上級職員の居住区、守備隊の兵舎、そして小さい教会がある。

町は南北約2,250メートル、東西約1,500

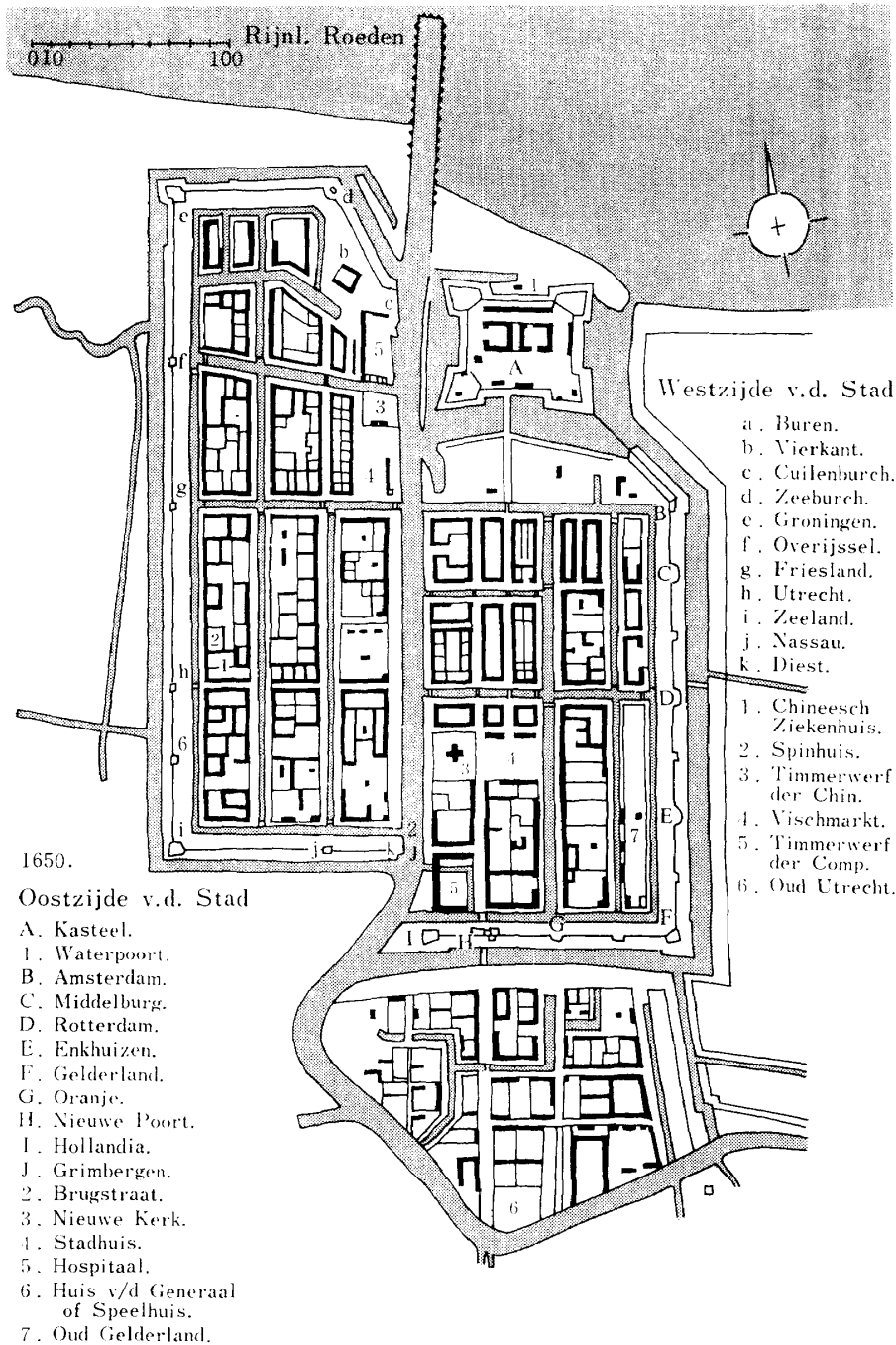


図2 1650年のバタヴィア市（出典：Breuning [1954: 35]）

メートルの長方形で、オランダ人が「大きい川」と呼ぶチリウン川が南北に走って、町をほぼ2等分している。東西どちらの部分も2本の運河が南北に縦貫している。これらを結ぶ東西方向の数本の横断運河がある。道路は

東西、南北に各4本あり、幅はいずれも30フィートである。このように運河と道路が町を格子模様仕上げている。

町全体が珊瑚石の高い壁で囲まれ、この城壁には22の堡塁がある。四つの門があって、町を囲む深い堀にかかる橋に繋がっている。

以上が町のプランである。次に、この町が建設期に内外から受けたいくつもの挑戦をみていくことにする。これらの挑戦は、多くの点で町の将来と町の最終的形態に決定的な影響を与えている。

(2) 外からの軍事的挑戦

まず、外からの軍事的挑戦、およびこれが食糧の供給と都市=後背地関係に与えた影響についてみていきたい。

バタヴィア建設後10年たたない1628年、マタラム王の軍隊が攻めてきた。この時、町を囲む城壁はまだ一部分しか完成していなかった。マタラム軍は2年にわたってこの町の奪取を試みたが、失敗に終わっている。これは、海上輸送による包囲軍への食糧供給が、会社によって切断されたた

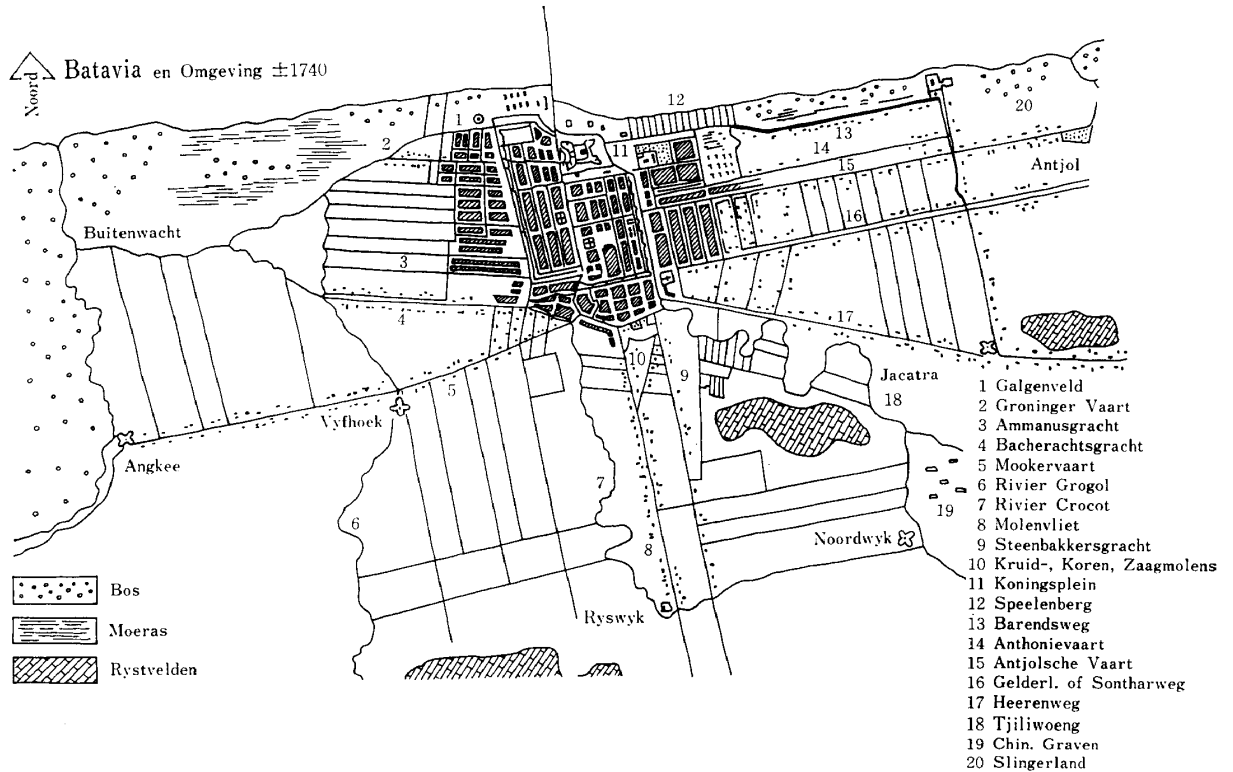


図3 1740年ごろのバタヴィア市とその周辺 (出典: Breuning [1954: 53])

めである。この防衛戦の間、バタヴィアの全住民集団が町の防衛のための義務を遂行し、また包囲軍に対する出撃にも参加している。この時の情熱的な記録を信じるなら、町の中の諸民族の間に真の団結精神が実現していた。

マタラム軍撃退後も外からの脅威は消滅していない。ジャカルタの元来の住民のほとんどがバンテンに避難していたが、このバンテンがその後約50年間オンメランデンを脅かし続ける。

この時期には町の近くの川の流れを通る短い偵察旅行が行われる程度で、密林に覆われた土地にはほとんど手がついていない。食糧のほとんどは海を越えて船で供給しなければならず、米はタイ、ビルマ、そしてのちにはマタラムから輸入している。

1639年バンテンとの休戦が成立すると、町の城壁のすぐ外に市場用野菜畑がつくられる

ようになるが、そこでさえ中国人栽培者はバンテンの放浪者たちに脅かされている。その後東、西、南の3方向に運河を掘ったことが、材木の輸送と食糧供給を容易にしたばかりでなく、オンメランデンの開発のためのインフラストラクチャーの建設に飛躍的前進をもたらしている。

1656年再びバンテンとの戦争が勃発し、町のすぐ外の製糖場10とレンガ工場23がごとく破壊された。政庁は安全保障措置として、城壁内に住むようになっていたインドネシア系諸民族を町から追放するという決定を下し、ジャワ人、アンボン人、バリ人などは城壁外のおおののカンポン (kampong, 居住区) に移住した。

合わせて、町から約1時間の距離のところに要塞が設置された。東のアンチョール (Antjol), 西のアンケー (Anké), 南のジャカトラ (Jakarta), ウィルヘンブユルフ

(Wilgenburg), レイスウェイクである。この五つの要塞に通じる道路と運河に沿って、食糧つまり米と野菜のための耕地が開かれ、ここでは砂糖などの輸用作物もある程度は栽培された。

このころになってようやく、ファン・ホーロン (Van Hoorn), デンメル (Demmer), キュノース (Cuneus) といった会社職員の、状況の安定化と農業植民地に関するレポートが現われるようになる。⁵⁾ 当時のこの状況を、18世紀初期のオンメランデンの地主のひとりシャステレイン (C. Chastelijn) が次のように明言している [Chastelijn 1876: 179]。

〔1659年のバンテンとの和平協定締結のあとに〕初めてわれわれはこれらの土地を発見し、そこに何らかの秩序をもたらすことができた。1670年まであまり前進がなかったが、この年以後、この土地は違った様相を呈するようになった。

1660年以後ヨーロッパ人に土地が払い下げられるようになるが、彼らは自ら働くのではなく、中国人に小作に出すか、あるいは奴隷を利用して。土地の価格は町からの距離によって決定されている。町から離れたところでは、先に述べたカンポンに住む原住民の首長に発給された土地もある。たとえば、バリ人のカピタンは、1667年にタンゲラン (Tangeran) の近くに大きな土地をもらっている。これは一定の夫役を提供し、米などの食糧を一定の価格で供出するという条件で与えられたものである。このようにして政庁は、町のまわりの荒廃した土地の再入植を試みたのである。

1680年には第2の防衛線が完成していた。これは町からかなり離れていて、西のタンゲラン、東のタンジョンプラ (Tanjongpura),

南のメーステル・コルネリス (Meester Cornelis), バイテンゾルフ (Buitenzorg) である。この地域は主として砂糖などの輸用作物の栽培に用いられることになるが、これについてはあとで述べることにする。

(3) 内からの政治的挑戦

次に、バタヴィア市内部で発生した東インド会社政庁の権威に対する挑戦をみていくことにする。

町の建設と防衛に参加したオランダ人自由市民は、市民的権利の獲得を望んだ。彼らは都市政府を望んだ。すなわちトップに座る会社職員に操られない自分たち自身の都市議会を望んだ。彼らは1649年、バタヴィアの総督とアムステルダム17人会を通さずに、オランダ共和国議会に直接手紙を送った。この事件は、1619年のバタヴィア建設以来、折に触れて積み重なってきた、彼ら自由市民と総督・東インド評議会 (Raad van Indië)・17人会の中の宿怨のクライマックスであった。

クーンおよびその後のいく人かの総督は、アジアのポルトガルの植民地が経済的自立性ゆえに、本国から切断されてもオランダの攻撃に屈しない持久力に、強い感銘を覚えている。クーンはバタヴィアにおける強力で大規模なオランダ人入植植民地の樹立が絶対必要と考え、これを可能にするために、自由市民に私貿易を許可すること、市政府に相対的自由を与えることを、17人会に提案している。しかし17人会はこれを拒否した。

この議論は1640年代に、バタヴィア市民社会の基盤の脆弱さを認識した総督ファン・ディーメン (A. van Diemen) が再び提起している。彼はいささか不器用に問題を提起している。すなわち彼は17人会に対して、この植民地に関してどのような考えを持っているのか明確に示してほしいと要求したのである。会社の重役たちが数年がかりでまとめた回答の

5) 17世紀のジャワにおけるオランダ人の入植植民地の樹立をめぐる議論については、次を参照。J. K. J. de Jonge [1865: viiff].

趣旨は、次のようなものである [Patriasche, A. R. A.]。

貴下はわれわれをディレンマに陥れた。なるほど、オランダ人入植植民地は会社の政治的地位のために非常に有益である、否、不可欠でさえある。しかしながら、経験の教えるところに従うなら、このような植民地は運動の自由と貿易の自由を認めない限り存在しえない。これが会社の屋台骨すなわち貿易を損なうことは確実である。

そもそも、独占貿易の厳格な維持が、オランダ議会による東インド会社への特許状発給の動機であったのだから、私貿易を行う市民を含む入植植民地の確立は会社の利益ではありえないのである。17人会はこの回答だけでは彼らの意図がなお不鮮明であるかのごとく、1651年10月14日に、「これがたとえバタヴィア自由市民社会の破滅を意味しようとも、われわれはこの企業の支配者であり続けねばならない」と書き送っている [ibid.]。

かくして、自分たちの中から選出する代議機関というオランダ人市民の要求はすべて排斥され、彼らは名目のみオランダ的な制度の中での生活を余儀なくされ、バタヴィア市の行政機構のすべての会社職員——たいていは東インド評議会のメンバー——に支配され続ける。

初期の自由市民のより多くの政治的経済的自立をめざす活動に関して、興味深い論文を書いたファン・デン・ベルフ (N. P. van den Berg) は、初期の数十年間の自由市民はふつう考えられているよりはるかに重要であると評している。彼らの声明文からはっきりわかることであるが、そこには決定的な市民的性格すなわち町の運命との一体感があった。バタヴィアは彼らの町であった。彼らはマタラムからの解放のために戦ったのであった [Berg 1875]。バタヴィアのオンメランデンからの孤立が終っていた1685年に、初め

てバタヴィアを訪れたファレンティンは、この市民の誇りのいくつかをまだ見出している。すなわち、「最も美しいのは、元旦のバタヴィア市民民兵の伝統的パレードであった。これは当時はまだ行われていたが、まもなく行われなくなった」と彼は記している [Valentijn 1724-1726: 107]。

17人会の厳しい姿勢の影響は、ファレンティンのバタヴィア訪問のかなり以前から現われていた。1654年、自由市民の没落がすでに甚だしく、17人会が総督に、自由市民の負担軽減のために何らかの措置が取れないかと尋ねるほどであった。これ以後自由市民の生活は総督の恣意に左右されることになる。

このことは司法と行政の運営からも明らかになる。市内では「旧き祖国の法 (Oud-Vaderlands Recht)」と呼ばれるオランダの慣習法が行われているが、政庁が直面する現実にはオランダとは全く異なるゆえ、抜け道が非常に多い。奴隷制度等々について特別条項を作成しなければならず、これらは地方庁令、総督布告等々の形式で発布されている。総督ファン・ディーメンの時代にこれらを集成したのが、1642年に出版された『バタヴィア法令集 (De Bataviasche Statuten)』である [Bataviasche Statuten 1862; Chijs Vol. V]。⁶⁾ また、特別に任命された各原住民グループの首長に、軽い罪をおのおののやり方で罰する権限が与えられていた。

バタヴィアの事実上の政府である東インド評議会の決定は、プラッカート (plakkaat) すなわち地方庁令として発布されるが、シャステレインはこれについて、「その結果はというと、それが掲示されている間だけ注意が払われ、取り去られるとすぐに忘れ去られる」と苦々しげに評している [Chastelijn 1876: 182]。

6) また、この *Plakkaatboek* [Chijs Vol. IX] の1776年の *New Statutes* を参照。

かくして都市議会、遺産管理人制度、孤児財産管理人制度、干拓地管理委員会など典型的なオランダの都市の諸制度は、オランダでは公正な政治の証拠として外国からの訪問者にしばしば称賛されるものであったが、バタヴィアでは表面を飾り立てるだけで内実のないポチョムキンの村のようになってしまった。総督ファン・デル・レイン（C. van der Lijn）はある時「会社に仕えるよりも異教徒やトルコ人のために働く方がましだ」と思わず呟いたことがあるといわれるが、こう思ったのは決して彼ひとりではなかった〔*Oost-Indisch Praetjen* 1663: e〕。

ここで次のように結論しよう。この町の最初の60年間に東インド会社は、この町の組織に東インド会社的な特徴を植えた。その際に会社は、この都市の機能を自らの事業に完全に縛りつけてしまった。市内にはヨーロッパ人、混血人、中国人、その他若干のアジア人少数民族が住み、アンボン人、ジャワ人、バリ人などが町のすぐ外のカンボンに住むという人種的配置ができ上がった。オンメランデンとの関係は二つの同心円の防衛線を通して実現し、町と第1防衛線の間は主として市場用野菜に、二つの防衛線の間は輸出用作物に当てられることになる。こうしてバタヴィアの絶頂期であるその後の30年間の枠組ができ上がったのであるが、この最盛期をもたらすのは会社の事業の好況、およびオンメランデンの輸出用作物のための開発の成功である。

IV オンメランデンと砂糖栽培—— 1680-1730年

1680年から1720年の時期に開発ラッシュと砂糖ブームがあった。中国の清朝政府が1684年に海禁令を廃止したあとの大量の中国人クレーリーの流入に助けられて、オンメランデ

ンは開拓時代のアメリカ西部のように開かれていった。中国人がオンメランデンで果たした役割については、筆者の最近の別の論文で論じているので〔Blussé 1981〕、ここでは、1730年代の生態系の破滅と1740年の中国人大虐殺に連なる若干の側面を、一般的に述べるに留めておきたい。

オンメランデンの森林が切り払われて、バタヴィア周辺の様相は一変した。低地地区は、米作用地を別にして、砂糖栽培用に模様変えしてしまった。東インド会社は、高い買入れ価格や豊富な前渡金といった措置によって、砂糖栽培を強力に促進した。17人会は最初は高い利益を約束して農民にこの新しい作物の栽培を奨励したのであるが、生産過剰になるや、購入量の割当てや価格引下げなどの措置を取って、生産を締めつけるよう命令を下している。この砂糖政策は、胡椒その他のスパイスであれ、コーヒーであれ、藍であれ、会社が農業に介入した場合に必ずみられる政策であった。オンメランデンの砂糖ブームは1720年代初めに終焉を迎えるが、これは購入量の割当てが行われるようになっていたためばかりでなく、土壌が消耗し、また砂糖液を煮つめるための薪の不足が甚だしくなっていたためでもある。

砂糖栽培が景観に重大な変化をもたらすことは、マデイラや西インド諸島などの先例からよく知られている。それは森林を食い尽くし、水を汚し、土壌を消耗させる。とりわけ、19世紀までのほとんどの場合にそうであったような、不注意なやり方の場合に、その影響には著しいものがある。自然のバランスを徹底的に破壊することさえ起こりうるのであり、オンメランデンの場合がまさにその例である。それまで材木生産地であったオンメランデンは、製糖場が薪を必要とすることによって、森林の大部分を失ってしまったのである。

また製糖場が川の近くにあるため、バタヴィアに流れる真水がすべて汚濁してしまった。この点で注目されるのは、1701年にオンメランデンの河川の上流部に偵察隊が派遣されたことである。この偵察隊はサラク噴火の2年後に、バタヴィアを流れる水の汚濁の原因を調べるために派遣されたもので、その報告書によると、チリウン川の水は、砂糖栽培を行なっているシャステレインの所有地に至るまでは、終始きれいであった。タンゲラン川の汚濁も同じ原因によるものと思われる。すなわち、水の汚濁はサラクの噴火とは無関係なのである [Leupe 1878: 494-505]。とはいえ、噴火の直後に川を流れ下ってきた土砂の堆積によって、チリウン川河口のすぐ沖合に砂洲が形成されたのは事実である。この砂洲がしばしばバタヴィアの不衛生の主犯として引合いに出されるが、これはすでにみたように誤った見解である。

町に入るチリウン川の水量が、サラク噴火後減少したことの方が、おそらく真実に近いと思われる。この水量減少の原因は、当時の人々も認めているように、サラク噴火のみならず、灌漑に水を取られたことであった。

しかしながら筆者は、バタヴィアの本当の水不足が明瞭になるのは1720年代後半と考えている。これは、砂糖開発のために生態系が雨水保持能力を奪われることによって生じる乾燥の典型例である。すべての証拠がこの1点に集中している。製糖場が閉鎖され、失業したクーリーが放浪者の群となって農村部の安寧を脅かすようになり、上流部の灌漑が荒廃に陥ってしまった。軍事防衛線はこれによって、伝染病攻撃線とでも呼ぶべきものになってしまうのである。

1740年の中国人の反乱と、それに続くバタヴィアの中国人の大虐殺の経緯と原因については、上述のとおり本稿では立ち入らないが、資料のグラフの鋭い落ち込みがこれを雄

弁に物語っている。次に、流血の事態以外の原因による、1733年以後の死亡率の突然の上昇に問題を絞ってみていくことにしたい。

V 町の衰微

(1) モンスーンかモーケルフェールトか？

バタヴィアの不衛生に関する質問に対する1753年10月14日付の回答を、ラッフルスが引用している [Raffles 1817: ix]。これが総督モッセル (J. Mossel) への医師パラヴィシニ (J. A. Paravicini) の報告書であることに疑問の余地はない [Paravicini 1885]。歴史研究者の楽しみの一つに、ある資料の中の情報を利用して、その資料の作成者とは反対の見解を証明することがあるが、このパラヴィシニの報告書がまさにこのケースである。

パラヴィシニは、病気は有害な毒気によって拡まるという、いわゆる毒気理論の信奉者である。この理論は、おそらくバタヴィアの運河の有害なガスについてのばかげた話から発生したものと思われるが、19世紀のかなりのおちまで通用している。さて、パラヴィシニは1733年以後の高い死亡率の原因を微細にわたって調べており、その犯人として可能性のあるものに、1733年にモーケルフェールト運河を掘ったことを指摘している。ところが彼自身は、多数の人が死んだのは異常なモンスーンのせいだと考えている。

上述のごとく、オンメランデンの灌漑システムの一時的衰弱によって、水の供給量が著しく減少したために、総督デュルフェン (D. Durven) は1732年モーケルフェールト運河をつくるよう命令を下した。この新運河は工事に従事したジャワ人人夫や近辺の村の人々の間に病気を拡めただけでなく、他の河川の河口の生態系に根本的変化をもたらしたために、バタヴィアに死をもたらすことになる。水の供給量は増加したけれども、勾配が小さ

いために水はあまり流れなかった。そのため、オンメランデンの土壌風化によって生じた多量の川泥が、住民の出す汚物や廃物と混ざり合って市内の運河に堆積した。いわゆる「泥のジャワ人（Modder-Javanen）」が年に1回チレボンから来て運河にたまった余分な泥を取り除いたが、これは際限のない仕事であり、徒らに貧しい夫役労働者を殺すだけであった。そのため、この清掃作業は早くも1770年代には行われなくなる。

モーケルフェールトはいくつもの川を横切り、そこから水の大部分を得ていたのだから、いまやこれらの川の河口に沈泥が堆積することになり、そのため町のまわりに大きな水たまりができ、マラリアが猛威を振るうようになった。マラリア以外で流行したのは、チフス系の病気と赤痢であった。豊かな市民たちは衛生的なウェルトフレーデン地区に移住し始め、1730年以後バタヴィアの町の南で建築工事の増加がみられるようになる。

(2) ヨーロッパから？

バタヴィアの住民の死亡率急上昇の原因に関するこの議論は、海事史家ブライン（J. R. Bruijn）の会社職員アジア派遣に関する最近の興味深い研究成果を慎重に取り入れることによって、完全なものになる。彼は1730年代のヨーロッパにおける船員の高い死亡率を論じる中で、バタヴィアにおける病気の突然の増加に触れて、次のように記している [Bruijn 1976: 223]。

東洋に到着した時、多くの船員がひどい病気にかかっており、彼らが病院に直行するのを許可せざるをえなかった。バタヴィアの病院における患者数と死亡者数の資料から、1733年以降とくに死亡者数が著しく上昇していることは明らかである。船上で猛威を振るった病気が、上陸後も大流行を続けた。上陸後の犠牲者も、航海中の犠牲

者の数に追加すべきである。

これが事実ならば、重要な意味がある。すなわち、バタヴィアの不健康性と1733年の死亡率の急上昇は、現地の事情とほとんど関係がないことになる。ブラインは、いわばアジア医学史におけるヨーロッパ海洋勢力の影響を示そうとするかのように、「アジアにいる会社職員の高い死亡率の原因は、アジアに求めるべきではない」と結論を下している [ibid.: 247]。

しかしながら、すでにみたように、当時の現地の資料はこの大胆な仮説と矛盾する。質量ともに豊富なこの資料は、風土病的諸要因の卓越を強調している。ブライン自身が作成したものも含め、その他のデータを精密に検討すると、彼の立場が維持しがたいものであることがわかる [Bruijn *et al.* 1979: 402ff]。

さて、入院を許可された船員のすべてが、本当に船上でかかった病気ゆえに病院に直行したのか否かを問題にするのは不毛である。そうであったか否かを本当に証明するのは不可能である。私はむしろ、6、7カ月にわたる長途の航海によって体の弱っていた船員たちが、まずこの町の荒れ狂う流行病の犠牲になったと主張したい。この仮説は簡単な計算によって証明しうる。次に示す数字は、1729、1733、1737の各年の、バタヴィアに到着した船の船員の航海中における死亡率、および会社職員——大部分は船員と兵士——のバタヴィアの病院における死亡率である。病気が船上で未曾有の猛威を振るったのであれば、それは航海中の死亡率に現われるはずである。航海中の死亡率は上記の各年に8.8%、10.4%、11.8%であり、確かに着実な上昇が認められる。しかしこの上昇は、同じ各年に14.2%、25.5%、36.4%という、バタヴィアの病院における患者の死亡率の上昇と比べると、無視しうる程度のものである。このデー

タから、病院における死亡者数の多さの原因が現地にあったことが明らかである。

(3) 「死の巣窟」

資料として二つの表を掲げる。表1 [Semmelink 1885: 387-388] は会社職員の死亡者数、表2 [Doodlijsten enz. 1784: 83] は町の実際の人口——すなわち市民、混血人、中国人、ムスリムそして市内の奴隷——の死亡者数を示す。

1743年に就任した総督ファン・イムホフ (G. W. van Imhoff) は町の衛生条件の改善を試みたが、その当時病気の本当の性格や原因がわかっていないため、ほとんど効果をおげしていない。

バタヴィアには会社職員と市民のための二つの病院があった。一つは市内に、他は市外にあったが、市内の方は「死の巣窟 (De Moordkuil)」という通称で呼ばれている。そこでは平均して4人にひとり、市外の病院では12人にひとりが死亡している。1776年のある報告書のおかげで、このデータを歴史的コンテキストの中に位置づけることができる。すなわち当時「ヨーロッパで最高の病院であるフランスのリヨンの病院では、15人の患者のうちひとりが死ぬ。パリの『ホテル・ジューイ (Hotel Dieu)』では、混んでいるために4人にひとりが死」んでいる [Radermacher 481, A. R. A.]。

スタフォリヌス (J. S. Stavorinus) の1798年の著書によれば、1768年にバタヴィアにいる会社職員5,490人のうち2,434人が死んでいる。これは9対4の比率であり、半数近くが死亡していることになる。また、バタヴィア以外の商館では、1年平均9人にひとりの会社職員が死亡している [Stavorinus 1798: 412]。バタヴィアの死亡率は、市内でも市外でも目立つようになっていたのである。スタフォリヌスは空家と荒れ果てた庭について語

表1 バタヴィアにおける会社職員死亡者数

年	到着者数	死亡者数	帰国者数	バタヴィアの会社の病院での死亡者数	小計
1714	4237	547	1785	459	
1715	2725	539	2295	469	
1716	4469	511	2380	453	
1717	5458	567	2065	494	
1718	6927	650	1955	591	2466
1719	4482	749	2550	660	
1720	6131	813	2210	750	
1721	5465	690	3660	614	
1722	7620	767	2880	730	
1723	6507	726	2700	657	3411
1724	5673	814	2790	769	
1725	5509	1030	3240	925	
1726	5557	976	3150	904	
1727	4316	745	3240	676	
1728	4037	720	2660	656	3930
1729	4812	706	2565	626	
1730	4591	713	2755	671	
1731	4713	859	2185	780	
1732	5074	870	2565	781	
1733	4384	1223	2660	1116	3974
1734	6396	1518	3804	1375	
1735	5571	1688	3024	1568	
1736	6828	1686	2461	1574	
1737	5481	2094	3871	1993	
1738	6293	1865	3931	1776	8286
1739	5469	1070	2748	998	
1740	4656	1339	2781	1124	
1741	4328	1156	2042	1075	
1742	5255	1174	2081	1082	
1743	3920	1367	2932	1283	5562
1744	4393	1682	2743	1595	
1745	4669	1798	2119	1604	
1746	5252	1675	1691	1565	
1747	5073	2094	2590	1881	
1748	4149	1353	2835	1261	7906
1749	5426	1609	1995	1478	
1750	6943	2187	2181	2035	
1751	5261	2099	1810	1969	
1752	6833	1789	2525	1601	
1753	7115	1765	2681	1618	8701
1754	5436	1670	2576	1517	
1755	5634	2279	2352	2109	
1756	5701	1606	3428	1487	
1757	3699	1518	2937	1441	
1758	5371	1759	3093	1638	8192
1759	5071	1440	3174	1337	
1760	4481	1401	2640	1317	
1761	4292	1083	2835	1000	
1762	5249	1455	2535	1390	
1763	4547	1815	2209	1750	6794
1764	4932	1882	2564	1757	
1765	5877	1907	3097	1754	
1766	5483	2188	2452	2039	
1767	6774	2590	2710	2404	7954
計	284545	72816	143737		67176

表2 バタヴィア市の死亡者数

年	ヨーロッパ人	混血人	中国人	ムスリム	奴隷	計
1759	121	632	463	482	1218	2916
1760	117	577	547	472	1441	3154
1761	129	523	547	552	1288	3039
1762	109	503	605	610	1180	3007
1763	170	732	1071	1048	1370	4391
1764	199	612	706	942	1236	3695
1765	106	537	552	685	1261	3121
1766	148	574	743	940	1343	3748
1767	137	564	802	912	1382	3797
1768	108	498	626	816	1571	3619
1769	140	578	728	805	1120	3371
1770	183	662	1026	1052	1268	4191
1771	113	573	895	1152	1287	4020
1772	148	615	1060	1253	1448	4524
1773	132	505	1072	1109	1103	3921
1774	81	461	829	770	884	3025
1775	127	620	843	1000	1505	4095
1776	112	629	782	1304	1390	4217
1777	110	546	751	1107	1509	4023
1778	133	589	731	1177	1598	4228
計	2623	11530	15379	18188	26534	74254

っている。

そんな町に住むのがどのように感じられるものか、ベルフスマ (J. Bergsma) の手紙から明瞭に読み取ることができる。彼は1772年の母親への手紙の中で、自らの奴隷に殺されたオランダ人夫婦の死体の発掘のようすを説明したあと、次のように記している [Bergsma 1872: XCVII]。

掘り出している間に棺を取り寄せました。棺はいつも用意されています。というのは、今夜誰かと夕食を取り、明朝墓の中に眠っている、ということがしばしば起こるのです。その次の日は競売の日です。そしてその次の日には、その人はもう忘れ去られています。

しかしながら、高い死亡率はそれだけでは必ずしも、町の空洞化と、さらには町の死滅

を導くものでないことを強調しておく必要がある。事実あとに述べるように、おそらくバタヴィアと同程度に不衛生であった、カルカッタの例がある。町の空洞化や死滅の原因は、むしろ事態の経済的側面に求めるべきである。そのためには、会社の拠点および群島内貿易の中心地という、バタヴィアの他の二つの機能に立ち戻らねばならない。

(4) 一時代の終焉

先に述べたように、バタヴィア市民の運命は総督の手に握られていた。この制度的枠組のマイナス面は、18世紀後半を詳しく検討することによって明らかになる。

ファン・イムホフは、総督に任命される前の1742年、17人会にバタヴィアの植民計画を提出している。彼はこの計画を通して、アジアにおける会社の動揺の回復を図ろうとしている [Heeres 1912: 441-621]。彼はこの計画の中で、事態の改善のために考慮すべき多くのことがらの一つとして、バタヴィアの地位をあげている。その時バタヴィアはちょうど、1740年10月の中国人大虐殺の影響から回復しつつあった。彼も、以前の多くの人々と同じように、バタヴィアの存立は会社の本拠地としての機能にかかっていると述べている。私貿易と入植植民地はつねに副次的な地位にある。私貿易は、会社の独占政策ゆえに、しばしば密貿易と紙一重になる。いまやバタヴィアの地位を再検討し、市民にアジアにおける自由で保護された貿易を許すべき時に至っている、とファン・イムホフは考えている。彼はまたバタヴィアの統治機構にも注意を払っていて、バタヴィア人に彼ら自身の都市議会を許すべきであると考えている。しかし、彼の提案のほとんどと同様、このバタヴィアに関する提案も結局、紙上の計画の域を出なかった。

彼の後任総督モッセル (在位1750-1761年)

は、オランダの歴史書の中で一致して評判の悪い人物である [Coolhaas 1958: 29-54]。その理由は、彼が総督在任中に「奢侈と華美を規制する規則」を定めて、バタヴィアの人々に124項目にわたる、身につけるべきダイヤモンド、衣服、帽子等々の種類を厳密に指定し、また、町を歩く時に従えることが許される奴隷の数等々を定めたことである。のちにフランス革命の思想がバタヴィアに流行し始めた時、ある人民集会において、これらの規制は無効であり、「自由なバタヴィア人の面汚しである」と宣言されている。モッセルはまた私貿易を不可能にしたということでも批判されている。

しかしながら、彼の総督在任中のバタヴィアは、高い死亡率にもかかわらず、繁栄期を過ごしたという奇妙な事実がある。この点で、歴史家たちが他の歴史家の引用で事足りりとしていることには驚くべきものがある。ド・ヨング (J.K.J. de Jonge) が100年前にモッセルを、会社の貿易の「おこぼれ (afval)」だけを市民に残した人物として描いているが、彼以後誰もがこの判断を鵜呑みにして原史料を調べていない。

モッセルは実際には、同時代の人々には認められていたように、すぐれた「エコノミスト」であった。彼は確かにバタヴィアとインドの間の私貿易を禁止しているが、他方、バタヴィアにおける貿易の大きな部分を民間企業家に残しておくことに100%賛成であった。彼は「会社は特別の商人であるので、特別の貿易に従事しなければならない。一般の、ふつうの貿易に従事してはならない。会社の貿易は特権貿易でなければならない」と書いている。彼がこの「特権貿易」に数えたのは、アヘンとスパイスの貿易、ヨーロッパとの間の航海、銅、胡椒、布の取引であった。彼はまた、独占の維持に主な関心のある17人会に自分の意見を売りつけるのも上手であって、

続けて次のように書いている [Jonge 1878: 213-214]。

われわれは何もかも取り込んだ貿易をしてはならない。なぜなら、利益をあげつつ、それを行う方法がない。会社よりも民間貿易商の方がうまく扱うことのできる商品を、彼らに残しておくべきである。彼らは食べ残し、つまり会社が彼らに残しておくものによって生きることができる。まさにそれゆえに、会社は、一部分は会社自身の貿易によって存立しようと同時に、他の部分は彼らが貿易から得る利益に間接的に依存して存在せざるをえないのである。

筆者がモッセルの文章の趣旨を曲解していないことは、オランダ国立文書館のネーデルブルフ (S. C. Nederburgh) コレクションの中の無署名の文書 [Nederburgh 299, A.R.A.] から明らかになる。おそらくネーデルブルフ自身の手になると思われる、この1794年9月29日付の文書は、バタヴィアの衰退をモッセルの後任者たちの政策と関連させて説明している。この文書の筆者は、モッセルがイギリスの商業利権をよく理解していたことを指摘し、次のように記している。

モッセルはイギリスの潜在的な交易能力との均衡を図ることをめざして、東インド諸島東部については、地理的位置ゆえに十分な資格のあるバタヴィアの私貿易を促進した。……その当時、市内の空気は今日と全く同様、非衛生的であったが、民間貿易商はこれを気づかずにいなかった。彼らは自分の商品の買手を機敏にみつけたし、地方の役人たちの妨害からも保護されていた。

この文書の趣旨は、モッセルの死後、彼の後任者たちが会社の全般的状況の悪化につれて、すべての貿易を再び会社に引き上げ、高い税金をかけて市民を完全に破滅させた、ということにある。同じ文書をさらに引用しよう。

1780年ごろバタヴィアの最も立派な周辺部は、すでに空洞と廃虚に変わっていた。そのころすでに、つい25年前にこの首都が享受していた、匂うがごとき繁栄は、跡形もなくなっていた。この事態の進行のすべてを経験した人々の、公平な証言を信じるならば……総督モッセルの下で非常に繁栄していた、豊かで偉大なるバタヴィア市民はすでに影を残すのみになっていたことがわかる。

こうしてバタヴィアの衰退は決定的になった。

バタヴィアのヘゲモニーが突如として、この上なく無秩序かつ急速に成長しつつあるカルカッタに移ったことを、ブラウデル (F. Braudel) が指摘している。18世紀末にカルカッタを訪れた、このフランスのモダール公の、あらゆるものの是非を明白にしたがるエスプリ・カルテジアンは、この町の複雑きわまりない発展を目撃して、「これは自由の成果であると人はいふ。この自由というのは秩序や調和とは両立しないもののごとくである」と強い衝撃を受けたことを告白している [Braudel 1979: 459]。この時バタヴィアは、破産に瀕する会社の独占主義者によって、緩やかに絞め殺されようとしていた。ここでオランダ、イギリス両東インド会社の根本的な相違を指摘しておかねばならない。すなわち、イギリス体制下では民間人に大幅な貿易の自由が与えられていたことである。

バタヴィアとカルカッタを比較対照したのは、ブラウデルが最初ではなかった。ファン・ホーヘンドルプ (D. van Hogendorp) が1799年に次のように書いている [Hogendorp 1799: 131]。

この2, 30年間にカルカッタ、マドラス、ボンベイで、いかに多くの会社が巨大な利益をあげたことか！ 私はこれらの町の、10万ポンド以上儲けた人々の名前を、100人

以上あげることができるかと賭けてもよい。……そして、同じ時期にここバタヴィアで、何らかの幸運を掻き集めることのできた人が何人いるだろうか？ 会社職員できわめて幸運にも利益のあがる地位に任命された、ごく少数の者以外にはゼロである。

(5) 移転の決定

筆者が別稿ですでに示したように [Blussé 1981]、バタヴィアの首都としての機能は17世紀と18世紀では大きく変化していた。ジャワにおいて会社は海洋交易勢力から領土支配者へと転化しつつあり、主な収入源が貿易の利益よりも領土支配からの収入に変化していた。この点とも関連して、1780年代に本拠地をバタヴィアからスラバヤかスマランの、もっと健康によいところに移す提案がいくつか行われていた。その主な論点は次のようなものであった。この移転によって会社は、ジャワの最も人口の多い部分に、より強く権力を及ぼすことができる。スマランならば米と材木の確実な供給を保障しうるし、何よりも「会社の最も強い封建君主たち」、すなわちスラカルタのススフナン (Susuhunan)、ジョクジャカルタのスルタン (Sultan)、マドゥラ領主が衝撃的な近きことになる。この点をスマラン移転の提案者が次のように記している [Meerman, A. R. A.]。

われわれは機会あるごとに、勇敢なジャワ人に、健康で熟練した兵士の行う演習の壮観さを見せつけることができるであろう。現在のバタヴィアでジャワ人がみるものはというと、町の門を守っている兵士の姿をした幽霊である。そして、われわれが毎年多くの人口を失っているために、バタヴィアにはもはや、海上であれ、沿岸部であれ、作戦行動を起こす能力のないことを、彼らは誰よりもよく知っている。会社は1799年に倒産し、その財産を引き継

いだ総督ファン・オーフェルストラテン (P.G. van Overstraten) は、そのような出費の大きい事業に投資するのは賢明でないとして、彼の事務所をバタヴィアの外の、少し高いところにあるウェルトフレーデン地区に1800年までに移すことに、直ちに着手した。彼はそうせざるをえなかったのである。というのは、イギリスによって封鎖されているために、ヨーロッパから軍隊を連れてくるのが不可能になっていたからである。したがって、これは、死を免れるために少し身体をずらすという問題であった。

こうして、首都の様相は港湾都市から軍事基地の町へと一変する。この大手術は1809年にダーネルスによって完成されるが、ダーネルスはまた、城塞、町の城壁、防衛線の要塞を取り壊し、運河を埋め、バタヴィアにとどめを刺したのであった。

キプリング流にいうなら、長く死滅していた、東インド会社の交易の中心であった、空虚で顧みられることのなかった土地に、近代のビジネス都市が再興するのは、19世紀末から20世紀初めのころのことである。

〔付記〕本稿は東南アジア史学会関西例会（1981年11月、京都）および京都大学東南アジア研究センターのシンポジウム「まちとむら」（1981年12月、京都）における報告に若干の加筆訂正を行なったものである。これら報告および本稿の日本語については、深見純生氏（摂南大学）の援助を受けた。

参 考 文 献

〔未刊文書の部〕

- Couperus Coll. No. 44. *Minuut Verhaal van de Toestand van Batavia*. 1e Afdeling. Algemeen Rijksarchief (A. R. A.).
- Meerman van der Goes. *Voorstel Zetel Hoge Regering van Batavia naar Semarang te Verplaatsen*. 1e Afdeling No. 212. A. R. A.
- Nederburgh Coll. No. 229. 1e Afdeling. A. R. A.
- Patriasche Missiven*. VOC No. 317. A. R. A.
- Radermacher Coll. No. 481. *Notul 1e Maart 1776*. 1e Afdeling. A. R. A.

〔刊行本の部〕

- Aristotle. 1330a. *Politeia*.
- Bataviasche Statuten, de. 1862. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië*. Nieuwe Reeks. 10: 393-518.
- Berg, N. P. van den. 1875. Een Smeekschrijf van de Bataviasche Burgerij. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* XXII: 533-567.
- Bergsma, J. 1872. Extract uit een Brief Geschreven te Batavia den 5en November 1772 door J. Bergsma aan Zijne Moeder te Leeuwarden. *Notulen Bataviaasch Genootschap* 10: Bijlage L (XCVII-CVII).
- Blussé, L. 1981. Batavia, 1619-1740: The Rise and Fall of a Chinese Colonial Town. *Journal of Southeast Asian Studies* XII(1): 159-178.
- Braudel, F. 1979. *Le Temps du Monde, Civilisation Matérielle, Économie et Capitalisme XVe-XVIIIe Siècle*. Paris.
- Breuning, H. A. 1954. *Het Voormalige Batavia: Een Hollandse Stedestichting in de Tropen. Anno 1619*. Amsterdam: Allert de Lange.
- Bruijn, J. R. 1976. De Personeelsbehoefte van de VOC Overzee en aan Boord, Bezien in Aziatisch en Nederlands Perspectief. *Bijdragen en Mededelingen Betreffende de Geschiedenis der Nederlanden* 91(2): 218-248.
- Bruijn, J. R.; Gaastra, F. S.; and Schöffner, I. 1979. *Dutch-Asiatic Shipping in the 17th and 18th Centuries*. Vol. II. The Hague.
- Castles, L. 1967. The Ethnic Profile of Jakarta. *Indonesia* 3: 153-204.
- Chastelijn, C. 1876. Batavia in het Begin der Achttiende Eeuw. *Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*. Nieuwe Serie. V(2): 177-193.
- Chijs, J. A. van der, ed. 1885-1900. *Nederlandsch-Indisch Plakkaatboek*. 17 Vols. The Hague.
- Coolhaas, W. Ph. 1958. Zijn de Gouverneurs-Generaal Van Imhoff en Mossel Juist Beoordeeld? *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 114: 29-54.
- Doodlijsten van de Stad Batavia 1759-1779. 1784. *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap* 2: 60-64.
- Finley, M. I. 1977. The Ancient City: From Fustel de Coulanges to Max Weber and beyond. *Comparative Studies in Society and History*. Vol. 19.
- Haan, F. de. 1917. De Laatste der Mardijkers. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 73: 219-254.

- . 1922. *Oud Batavia*. Vol. II. Batavia.
- Heeres, J. E. 1912. De "Consideratiën" van Van Imhoff. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*. Deel 66 : 441-621.
- Hogendorp, C. S. W. van. 1833. *Beschouwing der Nederlandsche Bezittingen in Oost-Indië*. Amsterdam.
- Hogendorp, D. van. 1799. *Berigt van den Tegenwoordigen Toestand der Bataafse Bezittingen in Oost-Indiën*. Delft.
- Jonge, J. K. J. de. 1865 (Vol. III) ; 1878 (Vol. X). *De Opkomst van het Nederlandsch Gezag op Java*.
- Keuchenius, W. M. 1875. Beschrijving der Bataviaasche Jurisdictie en Onderzoek naar de Oorzaken der Meerdere Ongezondheid van Batavia en Deszelfs Rhee. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* XXII : 390ff.
- Lekkerkerker, C. 1918. De Baliërs van Batavia. *De Indische Gids* 40 : 409-431.
- Leupe, P. A. 1878. Rapport over een Onderzoek naar den Toestand der Bataviaasche Groote Rivier na de Aardbeving van den 5den Januari 1699. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*. 4e Serie. Vol. II.
- Oost-Indisch Praetjen Voorvallen in Batavia*. 1663. Amsterdam.
- Paravicini, J. A. 1885. Van de Ongesondheid van Batavia en 't Redres om Dezelve voor te komen. In *Geschiedenis der Cholera in Oost-Indië voor 1817*, edited by J. Semmelink, pp. 348-368. Utrecht.
- Raffles, Th. Stamford. 1817. *The History of Java*. London. Vol. II.
- Semmelink, J., ed. 1885. *Geschiedenis der Cholera in Oost-Indië voor 1817*. Utrecht.
- Sombart, W. 1916. *Der Moderne Kapitalismus*. Vol. I. Leipzig.
- Stavorinus, J. S. 1798. *Voyages to the East Indies*. Vol. III. London.
- Telkamp, G. J. 1978. *Urban History and European Expansion*. Leiden.
- Valentijn, F. 1724-1726. *Oud en Nieuw Oost-Indiën*. Vol. IV. Dordrecht.
- Vermeulen, J. Th. 1938. *De Chineezzen te Batavia en de Troebelen van 1740*. Leiden.
- Weitzel, A. W. P. 1860. *Batavia in 1858 of Scheetsen en Beelden uit de Hoofdstad van Neêrlandsch Indië*. Gorinchem.